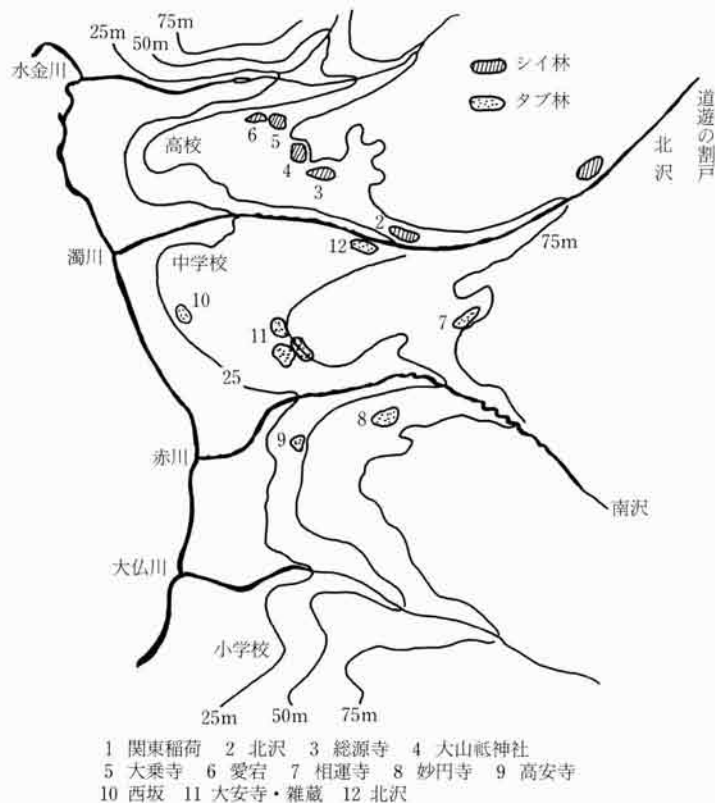


## 6. 佐渡相川金銀山の植生



(『相川の草と木』, 近藤治隆・1973)

図6-1 相川のシイ・タブ林の分布

### 6.1 相川金銀山の発見

「慶長6年(1601)に三浦治兵衛ら3人の山師に発見された鉱脈は、鮎川の溪谷をさかのぼり、鬱蒼とした茂みをぬけたところに、燦然とその露頭をあらわしていた」。津村節子の小説『海鳴』(1965)の一節を刻石した碑は、道遊の割戸(国指定史跡・宗徳町)の前の大立公園内に建つ。

慶長6年“燦然とその露頭をあらわしていた”のは、道遊の割戸のことである。鉱山用語で割戸は大きな露頭のこと。谷から60mの高さにそそり立ち、金銀の鉱脈をぢかに露出する露頭は世界最大という。

この露頭に人々は真上から、前から真後からとたくさんの坑道を掘りこんだ。山は頂上から真っ二つに割られ、数限りない狸穴がみられる眼前の道遊の割戸。金掘り大工たちの過酷の労働と、幕府の佐渡金山にかけた執念の強さを思わせる。この割戸は近くの宗太夫坑(そうだゆうこう・国指定史跡・清右衛門町)とともに、佐渡金山一の良質鉱脈の「青盤脈(あおばんみゃく)」を開発した坑道である。

『当代記』に「慶長7年(1602)、この頃より佐渡国銀倍増して一万貫目余上へ納める・・・」と記され、佐渡銀山の最盛期(元和・寛永)を迎えるのである。

この頃、山の奥に忽然と街が誕生した。現相川の人々は上相川と呼ぶ。「上相川の街の広さは五町歩弱。家数四百軒程度。人口は三千

か四千どまりであろう。このせまいくぼみに三千人の人が住んだということは驚異的なことであった。水田も畑もないところに、たちまち三千人の街ができた」と、歴史家の田中圭一はいう。相川の誕生、慶長6年(1601)のことである。

以来三百年余、一大鉱山都市の歴史をもつ相川。山は自然地形がなくなるほど変貌し原植生(自然の林)もほとんど姿を消した。

これは、鉱山の鉱山都市の宿命である。

### 6.2 相川金銀山の原植生

相川に金銀山が発見されない以前に、北沢・南沢の沢沿いに生活していた村人たち。この村をおおっていた原植生はいかなるものであったか。そもそも原植生とは、人間が植生に影響を加える以前の植生、有史以前の植生を指すが、ただ今は植生が破壊されない以前の植生を原植生と考えて論をすすめる。

現在、植生分類はブロン・ブロンケ(スイス1884～)の植物社会学的分類基準が採用されている。日本の原植生は次の3植生域にわけられる。

#### (1) ヤブツバキクラス

タブ・シイ・カシなどを高木層とし、ヤブツバキを中木層とする、林は暖帯林要素植物群で構成される常緑広葉樹林。タブ・シイ・カシなどの暖帯林とその生育域。

#### (2) ミズナラ・ブナクラス

ミズナラ・ブナなどを高木層とし、ヤマモミジ・ムシカリな



大安寺をおおうタブ林

表6-1 相川町江戸沢町大安寺のタブ林

階層	優占種	高さ	植被率	種数	環境
高層	B <sub>1</sub> タブノキ	20m	100%	2	大安寺寺林 海拔25m
亜高木層	B <sub>2</sub> ヤブツバキ	8m	70%	3	方位・傾斜 SE, 30°
低木層	S ヤブツバキ	1-2m	5%	3	調査面積 10×20m <sup>2</sup>
草本層	K タブノキ	0.2m	3%	4	出現種数 7種
B <sub>1</sub> タブノキ (幹径30~78cm)5・5・ケヤキ1・1					
B <sub>2</sub> ヤブツバキ (径7~27cm)3・3・モチノキ1・1・シロダモ1・1					
S ヤブツバキ+・マサキ+・タブノキ+					
K タブノキ+2・ヤブツバキ+2・ベニシダ+・シロダモ+					
林縁	オニヤブソテツ・トラノオシダ・キズタ・ヤダケ・ヤツデ・ヤブラ ン・ツルニチニチソウ				

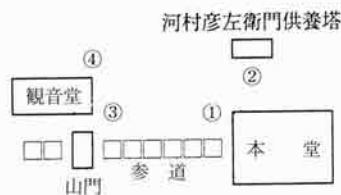
1987年11月19日・調査者 伊藤邦男

#### タブ林にふくまれる主要樹の毎木調査(数字は胸高幹径)

- ① タブ：40・78・51・20・17・35・30・60・73・28・21・59・25・43cm  
(幹径17~78cm・最大幹径78・平均幹径41.4cm)
- ② ケヤキ：61・77・73・75cm(幹径61~77・最大幹径77・平均幹径71.5cm)
- ③ シロダモ：15・21・25・13cm(幹径13~25・最大幹径25・平均幹径18.5cm)
- ④ ツバキ：12・7・15・15・15・19・27・18・13・16・30・13・13・17cm  
(幹径7~27・最大幹径27・平均幹径16.4cm)
- ⑤ モチノキ：12・18・19・33・25・25・31cm  
(幹径12~33・最大幹径33・平均幹径23.3cm)

#### タブ林の林縁にあるタブの単立木調査

No	根元径	胸高径	幹周	樹高
①	104cm	73cm	245cm	20cm
②	120cm	104cm	296cm	18cm
③	98cm	69cm	230cm	16cm
④	110cm	64cm	195cm	18cm



どを中木層とする、林は温帯林要素植物群で構成される落葉広葉樹林。ミズナラ林・ブナ林などの温帯林とその生育域。

#### (3)コケモートウヒクラス

トウヒ・シラビソなどの高木と、コケモモ・キバナジャクナゲなどの低木で構成される亜高山性針葉樹林とその生育域。コケモートウヒクラス域の上部は、ハイマツ帯（高山帯）である。

以上のように、日本の自然植生（原植生）は、丘陵地はヤブツバキクラス域（常緑広葉樹林域）、山地はミズナラ・ブナクラス域（落葉広葉樹林域）、亜高山はコケモートウヒクラス域（亜高山性針葉樹林域）となる。

日本の原植生と同じく、佐渡の原植生も、丘陵地はヤブツバキクラス域で、タブ・シイ・カシなどの常緑広葉樹林が丘陵地の原植生、山地はミズナラ・ブナクラス域で、ミズナラ・ブナ林が山の原植生である。

佐渡の金銀山は、津村節子の『海鳴』によれば、「鉾脈は、鮎川（北沢）の溪谷をさかのぼり、鬱蒼とした茂み（原植生）をぬけたところに、燦然とその露頭（道遊の割戸）をあらわしていた」のであるが、「鬱蒼とした茂み」こそ、原植生であり、その原生の森は、海寄りタブの森、より内陸側がシイの森、巨木林立する天然のタブ・シイの“鬱蒼とした茂み”であった。

## 6.3 原植生 タブの森

日本の磯山がそうであったように、佐渡の磯山も、この相川の磯山もタブの黒森でおおわれていた。タブの森は黒々とした樹冠の遠望される黒森。村の鎮守の森であり、漁場をきめる山あての森であり、村の魚付林でもあった。海に労（いた）つく人々にとって、磯の黒森は人々を強く誘引する、また便宜な森であった。なぜならば磯の黒林は、タブの巨木の林立する舟木伐る山であったと、柳田国男は『北小浦民俗誌』（1948）にのべている。岩礁海岸のイソネギに使われた最初の舟は、タブの一本単材のクリブネ（刳舟）であった。

小佐渡の南端、元小木・虫谷（むしや）・琴浦・宿根木・沢崎の村々も磯の黒森の中にできた村である。大佐渡の両津湾沿いの「小浦の黒森」と呼ばれる磯の黒森は、北小浦の鎮守さまの熊野神社の森を指す。

国中では佐渡高校をとりまく林、沢根の専得寺の林、大浦の尾平神社の林・いずれもタブの林である。

佐渡相川の原植生の森もまたタブの森であった。相川は北沢・南沢とよばれる二つの大きな谷と、その谷にはさまれて海ぎわにせり出した台地をもっているが、この台地の斜面も、台地も、谷の斜面もタブの林でおおわれていた。

「慶長のはじめ十数戸の村から独立した相川は、元和8年（1622）には運上銀6000貫（12万両）、砂金4貫匁、小判35,000両を納入するようになっていた。人口はおよそ3,500人前後、家数4,000軒、寺130

表6-2 相川町シイノキ沢(北沢)のスタジイ林

階層	優占種	高さ	植被率	種数	環境
亜高木層 B <sub>2</sub>	スダジイ	12m	90%	2	シイノキ沢(右岸)のスダジイ林 海抜 50~90m 方位・傾斜 S.45° 調査面積 7×10m <sup>2</sup> 出現種数 14種
低木層 S	ヤブツバキ	3m	60%	5	
草本層 K	ベニシダ	0.2m	2%	13	
B <sub>2</sub>	スダジイ (幹径4~18cm)5・4・タブノキ+				
S	ヤブツバキ(幹径2cm)3・3・モチノキ1・2・ヒサカキ+2 スダジイ+・ウミズザクラ+2				
K	ベニシダ+2・オクマワラビ+2・ショウジョウソウ+2・ホソバカ ンスゲ+2・ヤブツバキ+2・ヒサカキ+・スダジイ+・タブノキ+・ ウミズザクラ+・イタビカズラ+・テイカカズラ+・エゾイタヤ+・ ヤブコウジ+				

1977年5月28日・調査者 松井浩・山本敬一

表6-3 相川町「ゴールデン佐渡・宗太夫坑」のアカマツ林

階 層	優占種	高さ	植被率	種数	環 境
亜高木層 B <sub>2</sub>	アカマツ	8m	60%	3	宗太夫坑前のアカマツ林 海 抜 100m 方位・傾斜 NW.60° ∠ 調査面積 10×10m <sup>2</sup> 出現種数 14種
低 木 層 S	ヤブツバキ	4m	65%	6	
草 木 層 K	ショウジョウソウ	0.3m	2%	7	
	ウスゲ				
B <sub>2</sub>	アカマツ (胸高幹径20～30cm)3・3・コナラ(幹径10～30m)1・2 スダジイ(幹径30cm)+				
S	ヤブツバキ(幹径10cm)1・2・アカマツ1・1・キズタ1・1 アラゲヒョウタンボク+・スダジイ+・ヒメアオキ+ ショウジョウソウ3・3・ベニシダ+2・クマワラビ+2 ヤブコウジ+・トラノオシダ+・キリンソウ+・オオウシノケササ1・2				
K					
林縁	ツツバキ+・シャガ1・2・オオタチツボスミレ+・ヨツバムグラ+ オドリコソウ+2・ハコベ+2・スズメノカタビラ+2・ジシバリ+				

1992年4月6日・調査者 伊藤邦男

ヶ寺を数える大鉱山都市に成長していたのである」(『佐渡金山』・田中圭一・1980)。

忽然と出現した黄金の鉱山都市、山相も原形をとどめ得ぬほど変化し、原植生(自然林)が姿を消したのは確実である。ただ当時の原植生を今に伝えるのが、寺や宮の林や森である。“寺は130ヶ寺を数える”相川。寺社林は原植生が残存する。原植生を知るために幸いなることである。

江戸沢町の大安寺。慶長11年(1606)初代佐渡奉行の太田保長(ながやす)が建てた寺。山門へ登る石畳も美しいが、本堂の西側斜面の墓地の後に密生するタブの林(表1)もみごとである。

タブ林面積は400平方m。樹高20m。高木層はタブノキが優占(胸高幹径17~78cm・最大78cm・平均41.4cm)。林のふちには、幹周3mに近い巨木も何本かみられる。

亜高木層は8mでヤブツバキが優占、モチノキ・シロダモも混生。林床の低木層の植被率は5%と低く、ヤブツバキ・マサキ・タブノキが生育する。草本層は、タブノキ・ヤブツバキ・シロダモが芽生え、ベニシダが生育するが植被率は3%と極めて少ない。林床は暗く、その植被率が低いのは、タブの極相林の特徴である。タブ林は大安寺だけではない。相運寺(中寺町)・妙円寺(下寺町)・高安寺(下寺町)、西坂もまたタブの林である。

これらのタブ林の林のなかには私たちが、日常よく接する植物が多い。ヤブツバキ(中木)・マサキ・ヤツデ・ヒサカキ・マルバシャリンバイ(低木)・キズタ・イタビカズラ・テイカカズラ(つる木)・



相川シイノキ沢のシイ林

ツツブキ・オモト・ヤブコウジ・ベニシダ・ヤブラン(草本)などである。私たち日本人が庭木とし垣根とする植物たちの多くが、タブ林(シイ林をふくめ)を住み家とする植物たちである。私たちのなじみ深い草木たちの生育する森、タブの森、それは日本民族のふるさと森。一大鉱山都市であった相川にとっても、ふるさと森であることには変わりない。

6.4 原植生 シイの森

磯山の海側がタブの森、そしてその内陸側がシイの森であった。佐渡のシイはスタジイと呼ばれる種である。日本の暖帯林の主要樹がタブ・シイ・カシ(ウラジロガシ・アカガシ)であり、その生態配置は海岸より内陸にかけて、タブ帯・シイ帯・カシ帯と配置される。海岸風衝の影響を受ける立地にタブ林が配置され、シイ・カシ林はその後側に配置される。またタブは肥沃で湿気のある立地に林をつくるのに対し、シイ・カシは乾いたやせ地にもよく林を形成する。

相川町におけるタブ・シイの配置される立地もおおむね以上のべた様なちがいがある。

相川の北沢、この沢の奥に道遊の割戸や宗太夫坑がある。この北沢は「シイノキ沢」ともいわれる暖帯林のスタジイの生い茂る沢である。海拔50~90m、沢沿いの右岸は、東南向きで陽当たりもよく、特にシイがよく繁茂する。左岸の斜面は北西むきでタブが多い。シイ林の組成を調べてみた(表6-2)。



佐渡金山宗太夫坑附近のアカマツ林



関東稲荷のシイ林

樹高12m、胸高直径4～18cmの中木状の若いシイ林である。林内は直径30～60cmのスダジイの切株が多く、いままでに伐採され、その切株から萌芽再生したシイ林である。若いシイ林であるが、相川の原植生の生き残りともいえる貴重な林。「相川のスダジイ林」の名称で、新潟県の特定（重要）植物群落に選定（1978）されている林である。

ゴールデン佐渡の経営する「佐渡金山」の宗太夫坑は江戸時代の大型斜坑として名高い。この宗太夫坑より道一本はさんでみられる山は、赤茶けた大きな岩山。岩質は石英安山岩とされるが、赤茶色の岩塊。この岩塊に生育するのがアカマツ。他の植物をよせつけずアカマツが優占する。しかし、このアカマツ林（表3）をよくみると、アカマツに混じってシイやヤブツバキがボツンボツンと混じってみられる。

また、林のふちには、オモト・ツワブキ・キズタ・ヤブコウジ・ベニシダなどの暖帯林要素植物が生育する。林相はまぎれもなく、アカマツ林で土地的極相林であるが、その混生植物から判断すればまぎれなくシイ林域である。この地は海岸からおよそ2km。海拔100m。ここが相川町におけるシイ林域の上限である。これより上は大佐渡山地。ミズナラ・ブナ林域、落葉広葉樹林域となる。

ここよりすこし下がつて海拔85m地の五郎右衛門町にある「関東稲荷」。ここにはシイの古木があつて、その太いものは1mをこすものがある。昔の子はシイの実拾いをした。

近藤治隆（元相川中学校教諭・理科担当）は『相川の暖帯林』（1973）

に、「旧相川のシイ林は、北沢・山之神を中心に残されている。山之神の総源寺・大乘寺・大山祇神社・愛宕神社や北沢の斜面にみられるシイの林は、大昔このあたり一帯がシイの森におおわれていた、その名残の懐かしく愛すべき姿なのである」と、のべている。そして「本来は林の縁にあるべき植物（林縁植生）のフジ・ムラサキシキブ・ヌルデ・サルトリイバラなどが林内に進入したり、二次林（自然林のあとに二次的に育ってくる林）要素のコナラ・アカマツ・ヤマザクラが混入しているが、これはシイ林が、現在もなお破壊にさらされ、人間の干渉を受けていることを物語る」とのべている。

自然はすばらしい回復力、復元力をもつ。現在二次林化している林であっても、復元して自然林＝原植生＝となる。相川の前植生のタブ林・シイ林の前植生の保護とともに、その復元のためにわれわれは力をさしのべたい。